

大学生の友達意識に関する縦断的研究 －中学生時代との比較－

稲垣 応 顕*・長谷川 雅 樹**・松井 理 納***

(平成26年9月30日受付；平成26年11月5日受理)

要 旨

本研究は、2006年時に中学生であり6年を経て2013年時に大学2年生（8割が20歳）となった学生の友達意識を質的に比較検討すること、また良好な関係性構築における要件の変容に示唆を得ることを目的とする。なお、調査対象は全く同一というわけではない。しかし、両者ともに比較に耐え得る数の調査協力者数を得ていると考え本研究を行った。

本研究の結果、大学生の友達意識は中学生期と比べ、①若干ではあるが支えになってくれる存在を志向していること、②友人関係での悩みは減少し内容も分散していること、③広く浅くの付き合いから狭く深くの関係を結ぶ傾向があること、④友達形成に際し、他者の暗く内気な性格は必ずしもネガティブに機能しないこと、換言すれば外面の明るさよりも内面的なふれあいを志向する傾向が高まっていること、が示唆された。

KEY WORDS

友達意識 friendship awareness 大学生 university students 中学生時代 junior high school days

1 はじめに－問題と目的－

Erikson, E. H (1959) は、青年期の重要な発達の課題として、「アイデンティティ (Identity；自我同一性) の確立」をあげている。この用語についてErikson, E. H (1967) は、端的に「パーソナリティの再構成」のことであると述べた上で、「自我同一論の源泉は<中略>これこそが真実の私だという自覚である。<中略>内的な普遍性 (sameness) と連続性 (continuity) を維持する各個人の能力 (心理学的意味での自我) が、他者に対する自己の意味の普遍性と連続性とに合致する経験から生まれた自信」のことであると説明している。この発達課題を否定的に捉える人はかなりの少数派であろう。筆者も、青年が自立し社会化していくために、この発達課題は重要であると捉え支持している。またErikson, E. H (1971) は、アイデンティティの確立について「自己自身の中の永続的同一 (自己同一) という意味と、ある種の本質的性格を他者と共有するという意味を暗示するような相互関係」であるとも述べている。アイデンティティの形成に他者、とりわけ同じ時代を似たような感覚で生きる友人の存在は重要であろう。このことについてBlos, P (1967) は、青年期を第二の個体化と位置付け、その時期の特徴を「容姿や成績などに不安や葛藤を抱きやすいが、乳幼児期のように直接的に親に甘えや保護を求めることはなく、むしろ仲間関係の中で同じ不安や悩みをお互いに共有することにより孤独感や不安定さを克服しようとする」と指摘している。この指摘は、今日でも一般に支持されることであろう。

我が国においても、大学生には小・中・高等学校とは異なり学生個人の自主性や自立性が求められることが常である (武蔵・箭本・品田・河村, 2012)。伊藤 (1995) は、青年期には所属集団とのかかわりをどのように捉えるかが自己への評価や感情に影響すると述べ、天貝 (1995) は青年期における「自分や他人 (異性を含む友人) に対して抱く信頼感は、人一般に対しての肯定的な概念を形成し、自己概念の発達にも有効な役割を果たすと考えられる」と述べている。

しかし1980年代以降、青年後期に達しても積極的に自身のアイデンティティの形成を求めない者の割合が増加しているとの報告は多い (例；加藤1983, 伊藤2002, 稲垣2011 など)。大学入学後に生じる不適応を抱える学生の問題について、授業が面白くないといった学業に関する背景と共に友人関係の問題は極めて大きいとの指摘も多い (例濱田ら1994, ; 小林2000, ; 中川ら2006など)。現に、入学当初の学生に仲間づくりを目的としたオリエンテーション合宿などを実施している大学は増加している。

上述の先行知見を概観し基本的な問題意識として浮かび上がるのは、今日の大学生がどのような友人意識を有しているのかということである。本研究では、7年前に実施した中学生における友人意識についてのアンケート調査 (稲

*学校教育学系 **株式会社エルチェ ***富山赤十字看護専門学校

垣・尾崎・永田・島田・谷尾, 2007; 以下, 前回調査と記述) との比較において, 大学生の友人意識を把握することを第1の目的とする。また, 大学生の友人関係形成およびその深化に有用な知見を見出すことを第2の目的とする。

なお, 今回の調査対象者は7年前に実施した際の対象者とは若干異なっている。しかし, 下記の「方法 対象」で述べる通り両者ともに比較に耐えうる人数また特性を有する対象が得られたと判断し研究を行った。

2 方 法

2. 1 調査時期: 2013年10~11月

2. 2 対 象: 異なる県に所在するA, B, C大学に在籍する学部2年生計356名(有効回答数350名分)。これらの学生には, 質問紙調査の主旨と説明を行い回答が任意であることを伝えた承が得られた受講生である。なおその男女比は, 男子44%, 女子56%であり, 若干女子の方が多かった。また所属する学部は, 教員養成系学部(62%)・福祉系学部(20%)・一般学部(18%)であった。さらに全体の約8割が20歳(法的意味合いでの成人)であった。

一方, 比較データの対象生徒はD県E市の全中学校21校2年生2420名分である。このデータは, 筆者が前任校在職中の2000~2009年に当該地域のPTA連絡協議会と連携し企画・コーディネートしてきた『中学生サミット(旧称; おらっちゃサミット)』の2006年度(テーマ; 『友達関係を考える』)開催に際し, 話題提供及びディスカッションの基礎資料として調査したものである。

2. 3 調査内容: 前回調査による調査内容と同一の質問8項目。すべて, 選択式の質問である。質問項目を表1に示す。

表1 本調査における質問項目

-
- ① 「あなたにとって友達とは何ですか」
 - ② 「友達と呼べる人は何人いますか」
 - ③ 「現在, 友達関係で悩んでいることはありますか」
 - ④ ③で“ある”と答えた方へ「友達との悩みは何ですか」
 - ⑤ 「親友とは何ですか」
 - ⑥ 「親友と呼べる人はいますか」
 - ⑦ 「好きな友達の特徴を教えてください」
 - ⑧ 「苦手な友達の特徴を教えてください」
-

2. 4 分析方法

得られた回答を質問項目ごとに百分率シグラフ化した。また, その結果を同様にグラフ化した上述の前回調査の結果と比較検討した。

3 結果と考察

本稿では, 以下に調査結果および前回調査の結果を質問項目ごとに示し, 考察を加えていく。なお, 以下で示す「○%⇒○%」の数値は, 「中学2年生時の結果⇒大学2年生の結果」を意味している。

3. 1 ①「あなたにとって友達とは何ですか」について

中学生・大学生共に, 「一緒にいて楽しい」存在を友達と捉える割合が最も多かった(42%⇒55%)。また, 「気軽に話せる・相談できる(26%⇒12%)」, 「ライバル(3%⇒1%)」が減少し, 「支えになる大切な存在(18%⇒23%)」が若干の増加を示したことが特徴的であった。ただし, この結果は中学生のそれと大きな違いがない。すなわち, 大学生の友達という概念は, 6年前の中学生と大差はないということが示唆された(図1)。

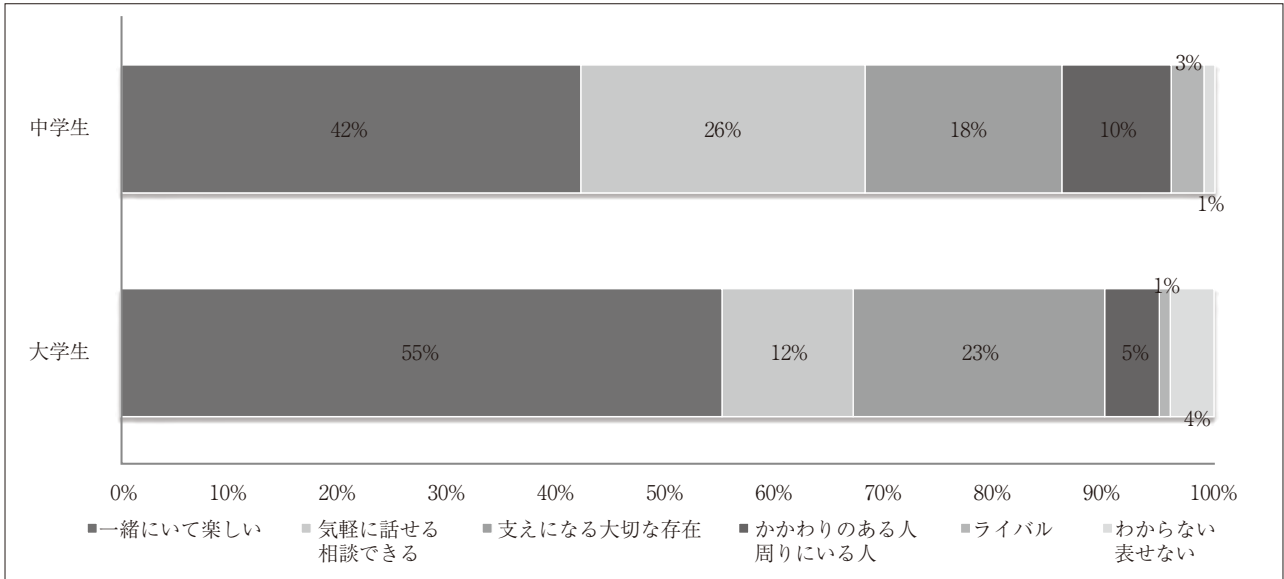


図1 「あなたにとって友達とは何ですか」の回答

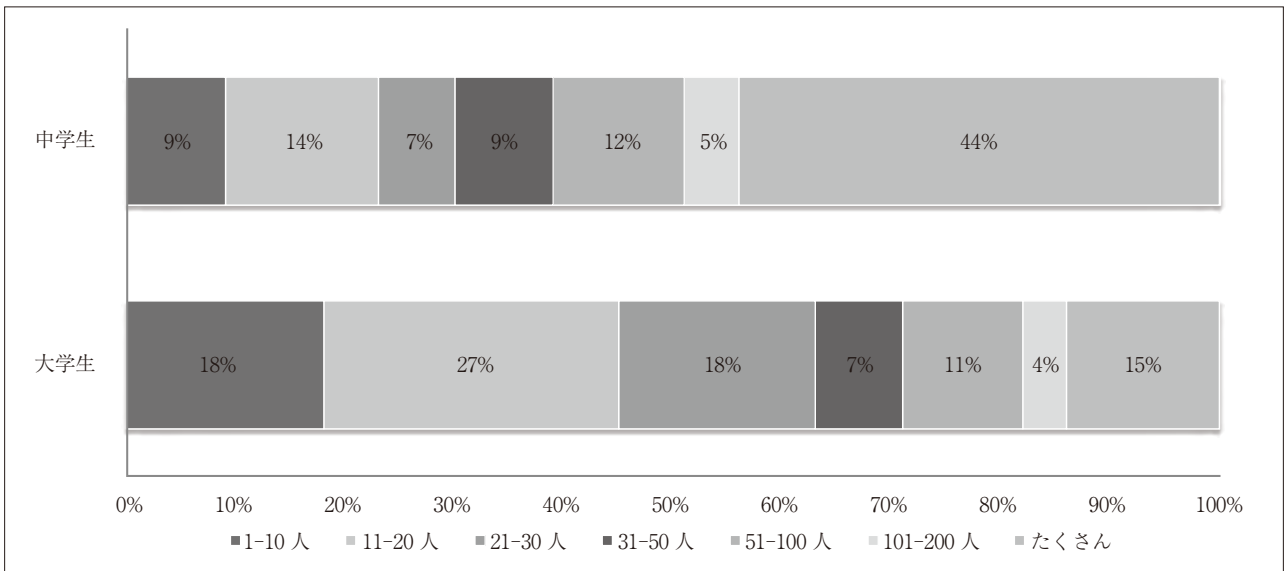


図2 「友達と呼べる人は何人いますか」の回答

3. 2 ② 「友達と呼べる人は何人いますか」について

中学生・大学生共に、「1人～10人」(9%⇒18%)「11人～20人」(14%⇒27%)「21人～30人」(7%⇒18%)の選択肢で増加がみられ、それ以上の人数では減少の数値が示された。また友達の数としては、中学生が「たくさん」(44%)であったのに対し、大学生は「11人～20人」(27%)が最も多かった。中学生で最も高い数値を示していた「たくさん」(44%)は、大学生では15%にとどまっている。この結果について筆者らは、当時の中学生がインターネットの掲示板などに書き込みをした不特定の人達を含め友達と認識していたのに対し(稲垣・尾崎・永田・島田・谷尾, 2007), 大学生になると“face to face”(=直接顔を合わせる)の関係にあり言語コミュニケーションによる感情交流のある相手を友達と認識するように変化したのではないかと考えている。ただし繰り返しになるが、大学生においても200人以上を意味する「たくさん」と回答した学生が15パーセント存在した。彼らがサークルやボランティアその他で自身の活動範囲を広げ、そこで出会い感情交流した人を友達と認識してカウントしているのか、インターネットの書き込みなどによる相手を含めて回答しているのかは不明である(図2)。

3. 3 ③ 「現在、友達関係で悩んでいることはありますか」について

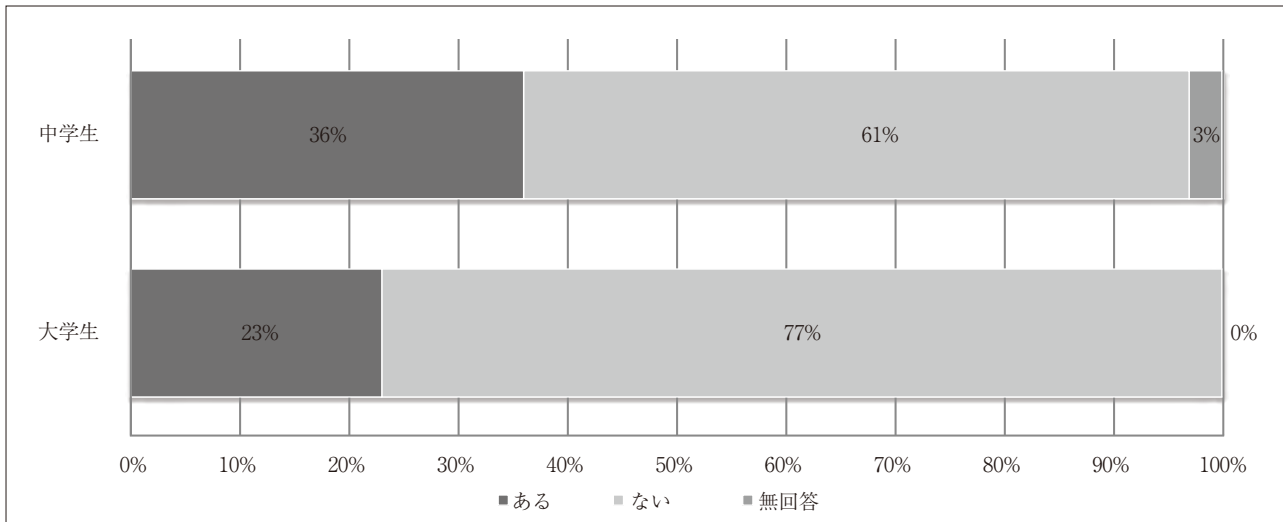


図3 「現在、友達関係で悩んでいることはありますか」の回答

中学生・大学生共に「ない」が「ある」を大きく上回っていた。また、「ある」(36%⇒23%)の数値が低減し「ない」の数値が(60%⇒76%)の数値が増加したことが特徴的であった。

この結果について筆者らは、かなりの違和感を有している。ちなみに筆者(稲垣)は、その違和感を前回調査の際にも有していた。そして前回調査では、「(2)」の結果とも照らし合わせ、「今日の生徒たちがインターネットで知り合った彼らの感覚でいう友達に対し、嫌になれば返信や書き込みをしないことが可能である＝関係を断ち切ることが可能なため、悩みも持たない可能性が考えられるのではないか。それだけ、生徒たちに“稲垣(2004)が述べる傷つきたくない症候群が増えている”, もしくは個人主義が広がっているのではないか」と考察した。この考察は、今日に至っても筆者の中で変わっていない。他方、確かに大学生になると、小・中・高校時代のように毎日決まった教室で同じクラスメートと顔を突き合わせなければならないということはなくなってくる。すなわち、嫌な人とは関わりをもたなくてよい環境が確保されるようになる。このことに関連し、小・中学校で不登校(登校拒否)を呈していた生徒の多くが、義務教育ではなくなった高校に進学したことを契機に登校行動を再開するようになることは、一般に知られているところである。中川ら(2006)は「大学生の不登校(登校拒否)は、義務教育と異なり、強制的に登校する、登校させるという義務はない」と述べている。筆者らはこの論述を踏まえ、その分だけ大学生は友人関係における制約が薄まり悩みも低減し内容も分散したのではないかと考えている。しかし、人間関係の有るところに何らかの悩みや葛藤はつきものであるとも考えている。今回の調査における「(2)」の結果について、大学生が誰とも交友関係を結ばず独りで生活していることはあり得ない。この結果は、さらにデータの蓄積と共に質的な検討の余地がある(図3)。

3. 4 ④ 「友達との悩みは何ですか」について

大学生は、中学生との比較で「本音を言えない」(24%⇒29%)、「付き合い方が分からない」(21%⇒23%)、「いろいろある」(17%⇒36%)の数値が上昇し、「相手が自分をどう思っているか分からない」(16%⇒6%)の数値が低減したことが特徴的であった。

この結果について筆者は、前回調査の考察で「本音を言えない、また付き合い方が分からない相手を友達というのであろうか。今日の中学生においては、友達の概念自体が我々と異なるのかもしれない」と記述した。しかし今回の調査結果と合わせ概観すると、その数値が上昇している。このことから、自身の公的・私的自己意識や向社会性が発達し心理的成長がなされるほど、他者を気遣う気持ちも高まり前二者の数値が上昇したとも考えられる。ただし、前回調査に関しては、中学2年生にどれだけ心理的発達がなされていたのかに疑問が残る。今になり、再度前回調査の結果を考察すれば、当時の中学2年生にいじめに対する鋭敏な感覚やピア・プレッシャーに関する意識が影響していたのではないかとも思われる。一方、数値が低減した「相手が自分をどう思っているか分からない」については、人は人・自分は自分という個人主義感覚の増徴という捉えもされるが、大学生にアイデンティティの確立に向けた自身の価値観や世界が高まり、他者に流されず振り回されない自分といった成長がなされている者が多いのかもしれないとも捉えられる(図4)。

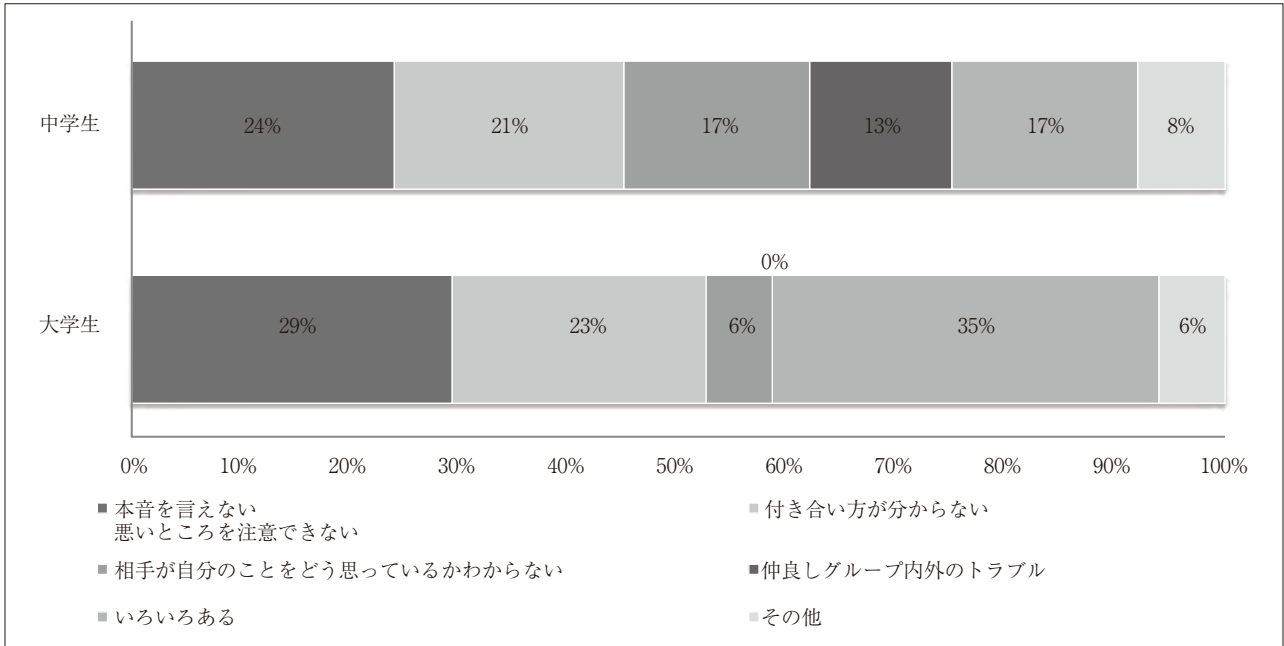


図4 「友達との悩みは何ですか」の回答

3. 5 ⑤ 「親友とは何ですか」について

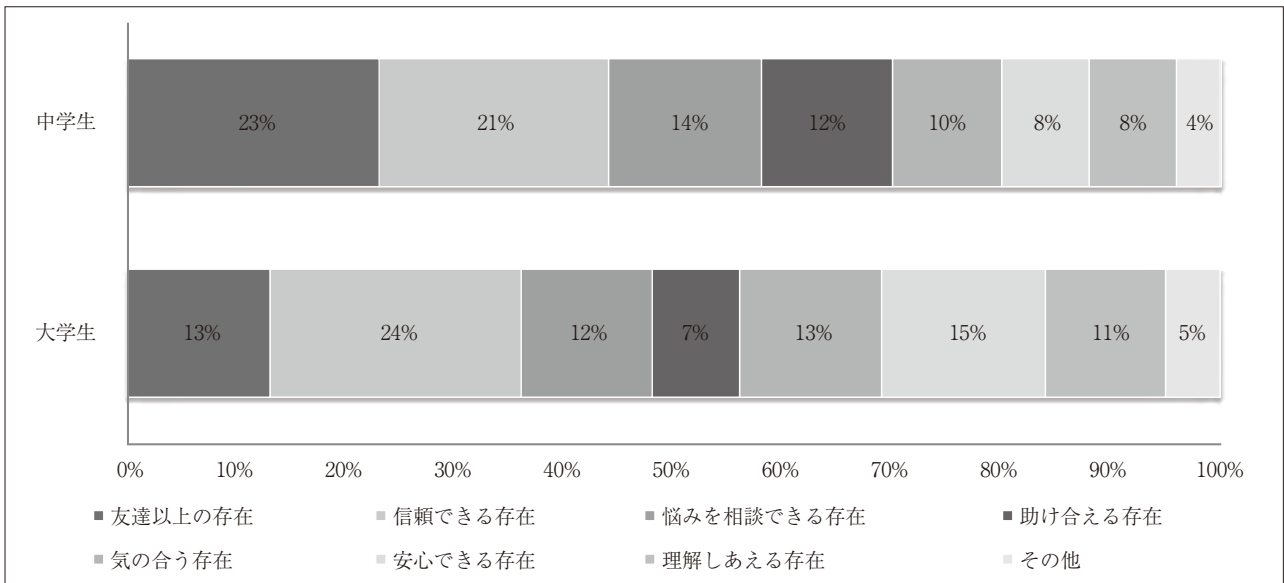


図5 「親友とは何ですか」の回答

中学生・大学生共に、「信頼できる存在」(21%⇒24%)が最も高い数値を示した。また、その延長であろうと思われるが、「安心できる存在」(8%⇒15%)が数値として約倍増した。一方、「友達以上の存在」(23%⇒13%)「助け合える存在」(12%⇒8%)の数値の低減も特徴的であった。

この結果について筆者らは、大学生にとって親友が共に友達以上の存在であることは言うまでもないことで、用語自体に対する意識が高くないのではないかと感じている。また、本稿の「はじめに」で引用したように「学生個人の自主性や自立性が求められる」(武蔵・箭本・品田・河村, 2012)段階の彼らにとっては、自身の意識としても“自分のことは自分でやる”といった意識が高まっているのではないかとと思われる。そして、それ以上に親友に内面的なつながり意識である前二者を求め重視している表れではないかと思われる(図5)。

3. 6 ⑥ 「親友と呼べる人はいますか」について

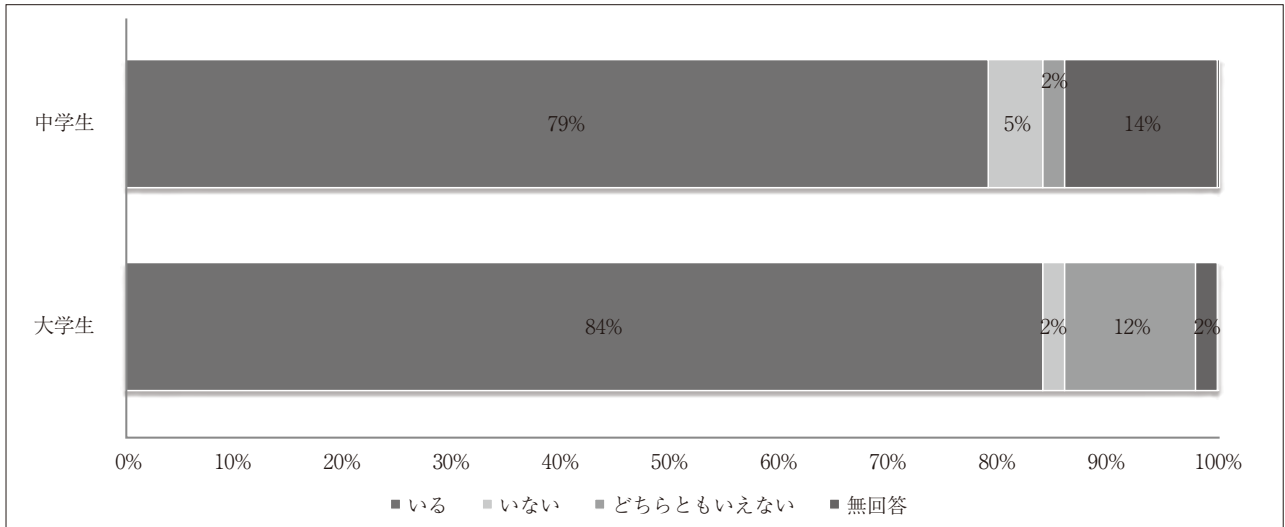


図6 「親友と呼べる人はいますか」の回答

中学生・大学生共に「いる」(79%⇒84%)が「いない」(5%⇒2%)を上回っていたことが特徴的であった。そして、「3. 1」の友達とは「一緒にいて楽しい」存在であるという結果、「3. 5」の親友の概念についての結果と照らし合わせてみると、中学生・大学生共に表面的な付き合いによる遊びを通じた楽しさを共有する友達と、それ以上の内面(特にネガティブな感情)を安心して表現できる存在を有していることが推察される。小森(2000)の教育相談室(カウンセリングルーム)を訪れる大学生への対応に関する「友人関係や教師との関係を支えにし、専門的な学問に興味をもつことで不本意感や不満感が解消する者も多くいる」との論述を踏まえれば、親友の存在が中学生・大学生、特に大学生のメンタルヘルスに重要な役割を担っていることが確認される。

ただし、上述の通り「いる」が高い数値を示す中で「いない」と回答するわずかな者へのケアが重要視される必要はある。前述の結果を再掲すれば、その数値は5%から2%へと減少してはいる。筆者はかつて「孤独と孤立は、別物である。孤立は、話す相手が誰もいないという意味で問題視されなされなければならない。しかし、孤独を楽しむという言葉があるほどで、孤独は必ずしも悪者扱いされるべきものではない」と書いたことがある(松井・稲垣, 2009)。前回調査また今回の調査における5%ないし2%の回答生徒・学生が、親友はいないもののある程度の友達関係は有しており、ポジティブな方向で自分の夢やしたいことに打ち込むが故にこのような回答をしているのであれば特段に問題視する必要はない。しかし、大多数の回答者が良好な感情交流による親友を有する中で、社会的・心理的に取り残されているとすれば、重大な問題として取り扱う必要がある。本研究では、そこまでは踏み込んでいないため、研究自体の課題として残される(図6)。

3. 7 「好きな友達の特徴を教えてください」について

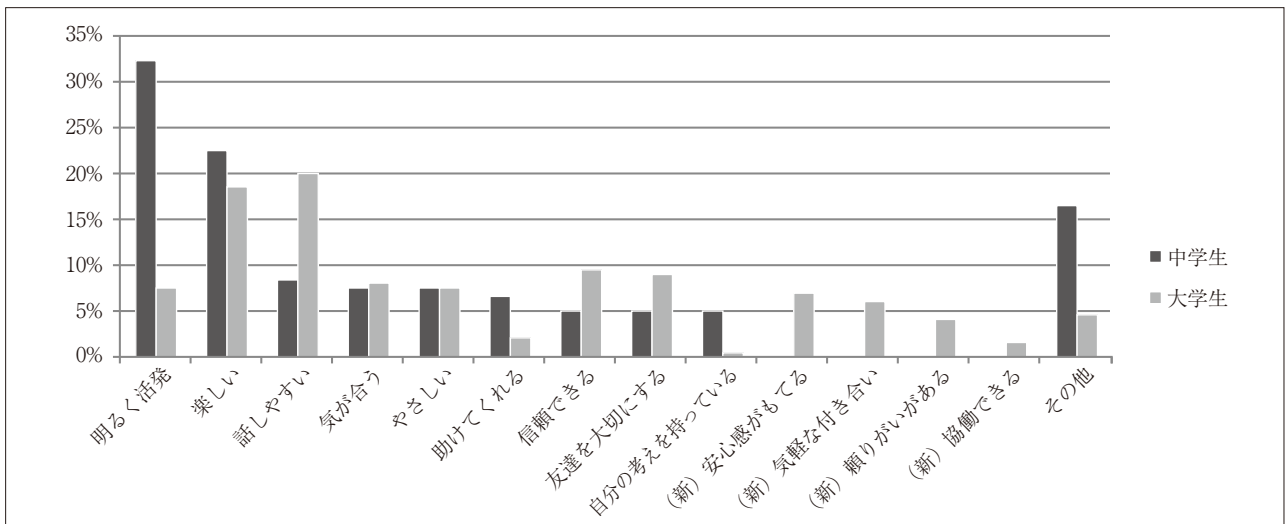


図7 「好きな友達の特徴を教えてください」の結果

大学生は、中学生との比較で「明るく活発」(33%⇒8%)の数値が大きく低減した一方、「話しやすい」(8%⇒20%)、「信頼できる」(5%⇒10%)、「友達を大切にする」(5%⇒9%)などの数値が上昇したことが特徴的であった。

この結果について筆者らは、大学生が表面的な明るさや活発さから内面的な人柄を重視するように友人関係の志向を変容させたと捉えている。また、やや具体的に述べれば、今日キャリア教育また支援でコミュニケーション能力の重要性が指摘されている中で、友達作り及び友達関係が親友関係に深まるためにも話しやすさを感じさせられるようなコミュニケーション能力が求められることが窺われる。他方、筆者らはこの項目の結果から大学生の愛情欲求=愛されたい欲求の高さを感じている。すなわち、本項で記した数値の上昇した二者は裏返して捉えると、何があっても裏切らず自分と共にいてくれる、自分を大事にしてくれる存在を求めている表れのようにも思われる(図7)。

3. 8 ⑧「苦手な友達の特徴を教えてください」について

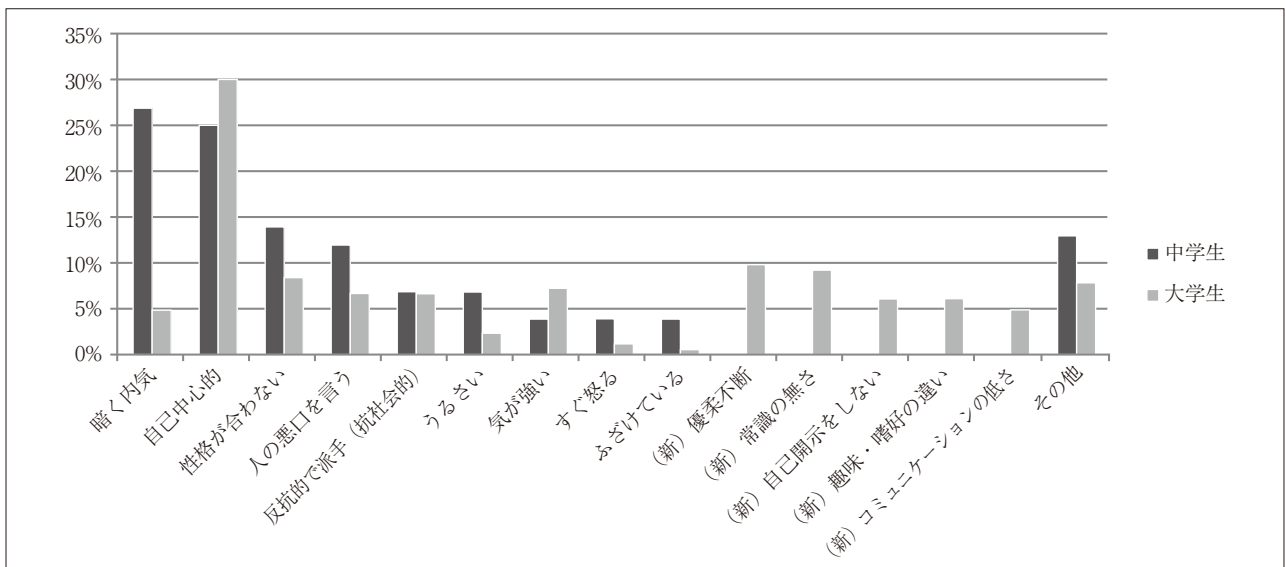


図8 「嫌いな友達の特徴を教えてください」の結果

大学生は、中学生との比較で「暗く内気」(27%⇒5%)の数値が大きく低減したこと、「自己中心的」(25%⇒30%)、「気が強い」(4%⇒8%)の数値が上昇したことが特徴的であった。

この結果は、大学生にとって相手の「暗くて内気」な性格が友人関係の形成また深化に大したネガティブポイントとして捉えられていないことを示している。むしろ「自己中心的」や「気が強い」といった、コミュニケーション場面における人当たりの激しさや独断的な特性が、ネガティブポイントとして捉えられていることが示されている。筆者らは、上述の「3.5, 3.6, 3.7」の結果と照らし合わせながら、この項目の結果が今日の大学生のデリケートさ、傷つきたくない症候群という様相の高さを裏付けているとも捉えている。そしてさらに、表面的で単に楽しければよい、自分が笑えればよいという一種の天真爛漫で幼兒的な表面上の明るい友達関係から、内面的な感情交流、質的な深まりを求めるといふ様相に心理的な変容が生じていることを感じている(図8)。

4 全体的考察と今後の課題

本研究は、大学生の友人意識の把握と良好な友人関係形成およびその深化に有用な知見を見出すことを目的に、大学2年生(約8割が20歳=成人)を対象に質問紙調査を行った。調査に際しては、前回調査と同一の質問紙を用い、分析においては前回調査時である2006年の中学2年生2420名分のデータとの比較を行った。そして特徴的な結果として、以下の4点が示唆された。

その第1番目は、中学生期には「一緒にいて楽しい存在」を友人として志向していた傾向が、内面的なつながりを重視するように「支えになってくれる存在」を志向する傾向に変容したことである。大学生は自身のアイデンティティ形成の過程において、心理的孤独を味わい、そこから生じる不安定さに対する拠り所となる他者を求めることと深く関わりがあると考えられる。ただし、その支えになってくれる存在として保護者は対象として選択されないこと

がほとんどであろう。筆者はこのことについて、「彼ら（＝青年期にある大学生；筆者 注）も親の保護を窮屈に思うようになると共に＜中略＞彼ら自身も知っているのである。自分がもう赤ちゃん時代には戻れないことを…」(稲垣, 2009)と書いたことがある。すなわち、その支えとなる存在として、同じ時代を似たような感覚で生きる同世代の友達であることは、容易に理解されるところであろう。このことは、心理的離乳また第二の誕生などの言葉と共によく知られているところである。

第2番目は、「1」と連動する事柄であるが、中学生時代には広く浅くの友人関係を形成する傾向のあった彼らが、大学生になると狭く深くの関係を形成する傾向を示すことである。この傾向は、発達心理学また臨床心理学などで従来から述べられている知見であるが、本研究においても改めてその傾向が確認された。筆者らはその背景として、大学生がアイデンティティの形成またある程度の完成期を迎える年代であり、悩みや不安、未来（将来）に対する時間的展望における心理的葛藤の中で、自己開示でき、共に前述の悩みなどを級友・共感できる存在を求めると推察される。

第3番目は、友人関係での悩みが「ない」と回答する学生がきわめて多かったことである。このことについては、「結果と考察」の当該項目の考察でも述べた通り、大学生の時期が自分の行動にも交友関係にも制約が薄いことや、インターネットやメールの影響とも考えられる「嫌ならば付き合いをやめてしまえばよい」といった感覚、もしくは前述した“傷つきたくない症候群”としての傾向を強めているためなど、いくつもの要素が考えられる。また、それらの要素が複雑に重なり合っているためとも推察される。ちなみに、この“傷つきたくない症候群”については、「現代の情報化・機械化が急速に進む結果至上の競争社会の中で生み出された私事化された個人が、本来的には優しさを求めつつも、一種のアイデンティティの混乱を伴い、表面的には対人関係を結ぶものの僕（私）もあなたの中に踏み入らないからあなたも僕（私）の心の中には入ってこないで」といった、本音を示しあわない関係を志向する」との注釈がなされている（稲垣, 2004）。

そして第4番目は、大学生における友達の形成や深化に「暗く内気な性格」は必ずしもネガティブに作用しないこと、である。筆者らは、この結果についても大学生がアイデンティティの形成期にあり、真面目に深く語り合える存在を志向する傾向があるためであろうと推察している。彼らは、表面的な明るさや楽しさを互いに演出しあい、一時期流行語ともなった「KY（＝空気が読めない；稲垣 注）」を嘲りながら、その一方で時代の流行に左右されない哲学やベリーフ（＝belief；信念）を求めていることも感じられる。加えて、この結果は本全体的考察の1～3を補強する内容であるとも感じられる。

ただし、本研究の課題として第1番目として、友達の用語に前回調査を意識し性別をあえて取り入れなかったことが挙げられる。すなわち、大学生という年代は男女ともに現実の問題として異性が気になるとともに「彼氏・彼女」の存在が実生活やメンタル面に大きな影響を与える。今後、友達関係の研究を進めるに当たり、異性との関係をどのように位置づけていくかは重要であろう。第2番目として、「(4)」の質問項目の結果として示した友人関係での悩みについて「ない」と回答した割合の高さについて、その要因を精緻に検討する必要がある。第3番目として、今回の調査は筆者が7年前に調査を実施した際の対象であった当時の中学2年生の年代が、ちょうど20歳の成人という節目を迎える年齢にあり、加えて筆者らの授業を受講していたことに端を発している。すなわち、前回調査から7年を経た彼らの友達意識の変容についてその一端を把握することは出来たと考えるが、何故そのような変容に至ったのかについて、換言すれば中学校2年生から大学2年生に至る生活のプロセスの中における心理的変容のプロセスは把握されていない。今後さらに、継時的な調査を重ねることで、友達意識の変容プロセスとその要因を探究することは発達・臨床心理学上、また彼らへの教育活動を実施していく基礎的知識として重要であると考えている。

文 献

- 天貝由美子 (1995) 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響. 教育心理学研究, 43, 364-371
- Blos, P. (1967) The second individuation process of adolescence. In Eissler, R. S., Harutman, H., Freud, A. & Kris, M. (Eds.), The psychoanalytic study of the child, Vol. 22. New York: International Universities Press. 162-186
- Erikson, E. H. (1959) Identity and he Life Cycle. International Universities Press, New York.
- Erikson, E. H. (1967) 岩瀬庸理 訳. アイデンティティー-青年と危機-. 金沢文庫
- Erikson, E. H. (1971) 鐘幹八郎 訳. 洞察と責任. 誠信書房.
- 濱田庸子・鹿取淳子・荒木乳根子・佐藤いずみ・加藤恵・福田智子 (1994) 精神保健上のケアが必要だった学生の大学生精神衛生用チェックリスト (UPI) の特徴: UPI の健康診断への利用-第2報-. 成徳大学研究紀要, 短期大学部 (II), 27, 85-91

- 稲垣応顕（2004）第3部第3章自己意識の発達と人格形成－青年期の臨床的問題－．塚野州一 編著 みるよむ生涯臨床心理学－生涯発達とその臨床的対応－．北大路書房，123-150
- 稲垣応顕（2009）第1章現代社会とピア・サポート．松井理納・稲垣応顕 集団を育むピア・サポート－教育カウンセリングからの提案－．文化書房博文社，11-62
- 稲垣応顕（2011）生徒指導・教育相談の視点からの学校づくり．稲垣応顕・黒羽正見・堀井啓幸・松井理納 学際型現代学校教育概論－子どもと教師が共鳴する学校づくり－．金子書房，27-53
- 稲垣応顕・尾崎康子・永田純子・島田みどり・谷尾千里（2007）中学生における友人意識についてのアンケート調査．富山大学スタラムプラン－学校バリアフリーへの挑戦2007－，105-111
- 伊藤美奈子（1995）不本意入学類型化の試みとその特徴についての検討．青年心理学研究，7，30-41
- 伊藤直樹（2006）学生相談機関のイメージ及び周知度と来談意思の関係．心理学研究，76，540-546
- 加藤厚（1983）大学生における同一性の諸相とその構造．教育心理学研究，31，292-302
- 小林哲朗（2000）大学・学部への満足感－学歴・転学部・編入・再受験－．小林哲朗・高石恭子・杉原保史 編 大学がカウンセリングを求めるとき－こころのキャンパスガイド－．ミネルヴァ書房，56-72
- 武蔵由佳・箭本佳己・品田笑子・河村茂雄（2012）大学生における学校生活満足感と精神的健康との関連の検討．カウンセリング研究，45（3），165-174
- 中川正俊・荒木乳根子・平啓子（2006）UPI（大学精神健康調査）とその後の心理的問題の発生および学業遂行との関連性に関する研究．田園調布学園大学紀要，1，51-67

Friendship Awareness

: Comparison with their Junior High School Day Longitudinal Study on College Students's

Masaaki INAGAKI* · Masaki HASEGAWA** · Yoshino MATSUI***

ABSTRACT

The study's purpose is to conduct a qualitative analysis of university students' friendship awareness, compare the obtained data with their junior high school days, and determine implications about the requirements for building positive relationships. The subjects were second-year university students (as of 2013), 80% of whom were 20 years old, and the data from their junior high school days had been obtained seven years earlier (2006). It should be noted that the participants were different. However, it is believed that an adequate number of participants were obtained for comparison in both cases.

Results showed that in comparison with their junior high school days, the following points were suggested regarding university students' friendship awareness: 1) There is a slightly higher degree of longing for someone who can provide support; 2) There are fewer worries about friendships and contents of worries are more dispersed; 3) There is a tendency to shift from broad and shallow relationships to narrow and deep ones; 4) In terms of friendship forming, friends' unhappy and introverted personality does not necessarily function negatively; in other words, there is a stronger tendency that they seek more internal rapport than apparent gaiety.